

◇◇◇◇◇ 公教育は家庭教育に ◇◇◇◇◇  
◇◇◇◇◇ どこまで関与するか(6) ◇◇◇◇◇

## 公教育と家庭教育の かかわり

流田 直

一、いまの子どものくらしから

(1)子どものくらしを追う

学校教育の中で家庭生活や家族とのかかわりについて触れる場面はあまりない。生活科、家庭科、道徳、特別活動の一部等に見られるが、子どもたちの意識は低い。あまりにも身近な事柄で意識することもなく過ごしているからである。また、学校社会は生活を持ち込むことなく、独自の子ども社会によって営まれている。教師も家庭の諸問題を背負っている子としてはとらえず、目の前の子どもの姿でとらえようとする。

学校で家庭についてふり返らせると戸惑う子どもが多いが、高学年にもなると、今後の生き方や自分自身を考えさせる学習も大切である。家庭科の学習で生活時間を調査し、それを元に家庭生活や家族とのかかわりをふり返らせて、家族の一員としての自覚をうながす指導を試みている。

図1は本校の典型的な子どもの生活時間調査の事例で

▼ 図1

自分と家族の生活時間

6年 | 組

調査日 平成5年4月19日(月) (平日の一日を選ぶ)

	AM											PH				AM								
	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
私	睡眠	睡眠	通学	小学校	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	睡眠
姉	睡眠	睡眠	通学	中学校	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	睡眠
妹	睡眠	睡眠	通学	小学校	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	睡眠
母	睡眠	朝食	朝食	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	睡眠
父	睡眠	睡眠	通学	会社	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	通学	睡眠

ある。  
 夜ふかし、睡眠不足、遊びや手伝いの時間が少なく、  
 家族団欒は休日にししか取れない等調べた結果で話し合う  
 と、多くの子に共通した問題が浮かんでくる。  
 年ごとに子ども自身の自由な時間は減少し、家族がそ  
 ろう時間も少なく、本来の家庭の機能が様変わりしてき  
 ている。  
 (2)子どもの家庭生活のようす  
 これは単に本校独自の問題というより、日本全体、特  
 に都市社会の子どもの生活に顕著である。  
 図2は本校の資料、表1はモノグラフ・小学生ナウに  
 掲載されていた各国都市社会の子どもの比較である。  
 この表を見ると、国によって子どもや親の生活意識や  
 実態が異なっているのがわかる。遊びのようすを見る限  
 りでは日本の子どもが少なすぎるようではないが、手伝  
 いになるとやっている子の割合がかなり低い。福祉国家  
 といわれるスウェーデンの子どもの低いのも目立つ。

▼ 表 1

夕食の様子

	孤食率	全員で	父親のみ不在 (%)
東 京	4.6	40.7	39.3
ハルビン	3.3	75.4	16.6
サクラメント	4.6	77.4	8.5
ストックホルム	10.5	64.7	13.4
オークランド	8.2	65.9	12.6
バンコク	7.1	67.4	17.8
ソウル	5.0	55.2	29.4
タイペイ	1.7	73.5	16.6

○ 最大値と2位

昨日、下校後友だちと遊んだか

—遊ばなかった子の%—

東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
62.3	85.5	49.4	68.2

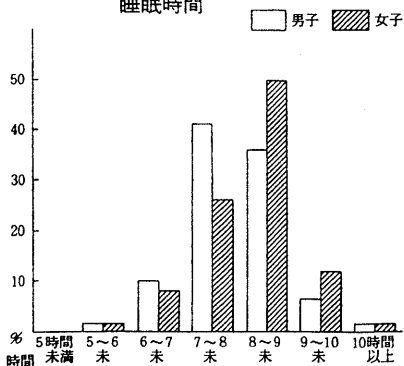
家事の手伝い（毎日する割合）

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム	オークランド	バンコク	ソウル	タイペイ
洗濯	1.7	3.5	6.5	1.0	4.4	9.7	3.2	2.1
夕食の買い物	2.4	6.4	7.1	2.4	7.3	8.5	10.2	8.9
庭や玄関の掃除	2.7	6.0	3.6	1.3	3.2	11.3	—	—
部屋の掃除	4.3	17.8	19.3	4.5	19.3	22.0	30.3	11.0
皿洗い	5.0	18.6	13.4	4.3	31.0	28.1	7.5	5.8
夕食の手伝い	6.4	4.5	15.8	2.7	13.7	7.6	6.6	7.6

— 質問項目なし

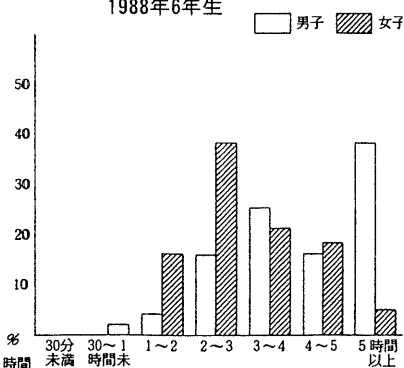
▼ 図 2

睡眠時間



家庭学習時間（塾の往復も含む）

1988年6年生



父親の不在時間（就労・通勤時間含む）

不在時間	割合 (%)
9時間未	5
9~10時未	2
10~11時未	13
11~12時未	18
12~13時未	11
13~14時未	11
14~15時未	8
15時間以上	19
その他(出張他)	9
母就労数	8名

一方アメリカの子どもは皿洗いや夕食の手伝いをよくやっていることから、生活水準の高低によるというよりは、親の子どもを育てるためのしつけや態度、つまり家庭教育観のちがいによるものと考えられる。次代を担う子どもに小さいうちから労働の大切さや家族の一員としての役割を持たせようとする親の態度のちがいによるのだろうか。

日本もこのあたりを真剣に受けとめる必要があるであろう。

どんなに家事労働が機械化され減少したといっても家族の一員であるという自覚を持たせるためには家事労働の分担は意義があるし、労働という体験から学ぶものは大きい。

日本の子どもが無器用になったとよく言われるが、このあたりの日々の積み重ねも大きな原因かもしれない。夕食の様子からも日本が際立っている点が表れている。父親不在のスタイルが当たりまえになって久しいが、これはやはり考え直さなければならない。確かに勤

勉に働く姿そのものであるわけだが、家庭や家族を考えるとこの方向は気がかりである。アメリカなどでは仕事を一時中断しても夕食時は父親が顔を見せると言われているが、数値からも納得できる。人間関係を保つ努力がうかがえる。

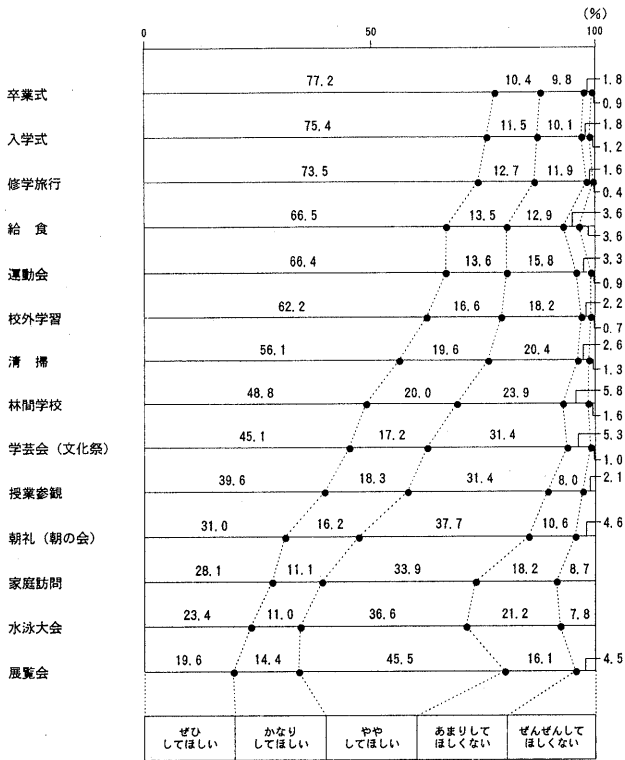
再び本校の場合の図2にもどるが、父親の一日の不在時間を見ると山が二つ見られる。

しかも十五時間以上の方が高い。働き過ぎのお父さん像が浮かぶ。家庭においては母親が父親役もせざるを得ない状況である。その上、競争社会に生き抜くために学業成績を上げることに目が向けば子どもはどうなるか、表の示す通りになってしまう。遊びを奪われ、家事からも遠ざけられ、ただ勉強勉強と追いやられて忙しい毎日を送っているのである。

こうした風潮を断ち切るためには、どこから手をつけていったらよいのであろうか。

教育に携わる身としては悩まばかりである。

▼ 図3 学校行事でしてほしいこと



モノグラフ、小学生 Vol. 13-2

二、公教育のかかえる問題

(1)あれもこれも学校に求められる

くらしの変化によってもたらされたさまざまなひずみやゆがみは、公教育の機能低下や力量不足としてとらえ

られがちである。  
本来、しつけや心の成長にかかわる部分は家庭教育が主力であったが、社会の変化や家庭教育力の低下に伴い、学校教育に求められるようになった。

学校が児童生徒の体から食事まですべてにわたって細

かくかかわってきているのは事実である。

親も他者に依存する方がラクで、安価な学校任せで、満足しているところもある。

こうした現象は何も近年に始まったことではなく、学校が地域のコミュニティの中心であった時代から受け継がれてきている。図3を見ると親の学校への要求度の状況がうかがえる。

しかし、一方で学校教育に

すべて任せて満足しているわけではない。期待されていない部分も年々増加してきている。

特に、校則の問題は学校の過干渉という形で受けとめられ、管理教育という望ましくない言葉で責められてくる。

校外でおきた様々な悲劇でも校長や責任者が詰問を受けたりするといった現状がある。

学校と家庭が対立して、互いに信頼関係が築けないところでは子どもの教育などありえないと思うのだが。

学校給食や学校行事のいくつかは、子ども救済や娯楽、また地域の人々の交流をはかる目的で生まれたが、今なお同じスタイルで継承されている。まわりが大きく変わっても学校そのものはあまり変わらずにきている。

新しい要望が出ると受け入れ。その中で最大限工夫をはかることが力量ととらえられてきた感がする。しかし、もうそれも限界にきている。週五日制の話題が出はじめ、ようやく本気で学校教育のあり方が問われ始めてきたからである。この機会に学校のあり方を考えてい

きたい。

## (2) 子どもの心を無視して授業はできない

現行の学習指導要領発足の前に臨時教育審議会が話題をまいたが、大きな制度改革にまでは至らなかった。長年かけて作り上げた制度を変えることはかなりエネルギーがいるし、経費もかかる。教育のように人の成長にかかわる場合、急激な改革よりは徐々に変えていく方が望ましいという慎重論が主流である。これについては異論はない。では、現状をより望ましい方向に転換するためには何から手をつけていったらよいのであろうか。

学校の機能を明確にして示し、できない部分は家庭や社会に委ねるといのがわかりやすいが、人間の教育というものに分業が成立するのだろうか。ある程度大きくなれば対応のしかたも状況で判断できるようになれるが、小さい子どもの場合それがむずかしい。

どの場面でも心を通わせ合って身につけさせたり、できるようにさせたりする必要がある。また子どもも信頼

関係の中で安定した状態でない物事に集中できない。

一人ひとりの子どもの心の持ちようが学習にかかわってくる。成果にも響いてくる。ことが、学校教育のむずかしさである。心の問題が人間としての普遍性の部分であり、教育改革が進めにくい所以であろう。

### 三、公教育のこれからのあり方をさぐる

#### (1) 公教育の新しい課題

親で子どもの幸福を願わないものはいない。今、少し我慢をすれば、先に幸がくると信じて塾にも行かせ受験にも向かわせる。早い時期に安全圏に入れば後は苦労しなくとも進める。こうした一見矛盾のない説得が多くの親や子ども自身をも納得させてしまう。

それも子どもが小さいほど有効であり、多くの親子が一旦決めるとまっしぐら、こうして進学塾の対象がどんどん低年齢化する。

こうした状況の中では、いくら個性の尊重、真の人間

性とは、と解いたところで虚無感だけが残る。しかし、問い続けていかなければ子どもの成長がゆがめられていく。一時の感傷にすぎない、子どもはもつとたくましく、良い学校に進める方が後々幸せである、との反論も強いが、一生に一度きりの子ども時代にも心やすらぐ楽しい日々を送らせた。

なぜなら、人生の中で何物にもとらわれずものごとに熱中し、自由なやわらかな素直な心で人や物と出会い、心を動かすことのできるのは何と言ってもかけがえのない子ども時代を置いてほかにないと思うからである。

そしてそれはその後の人間としての生き方にまで影響を及ぼすからである。目覚しい、めまぐるしい現代社会の中で、そんな悠長なことを言っていられないと批判されても、こうした時代こそ現実離れた夢多い子ども心を育てていきたいと願う。小さいうちから、おとな社会の裏表やかけ引きを知らされ、他との競争のみに関心をもち、目を輝かせ、打算的な判断で行動していかざるを得ない子どもたちに、今こそ真剣に手を差しのべる時

ではないだろうか。現実の厚い壁に向かって、どのような手だてがあるのだろうか。

学校においても親と十分話し合いをしたい。これからの時代を考えると、個の幸福を追求していても幸せにされない。人類に地球規模の課題が次々に出され始めたからだ。環境問題、異常気象や災害、食糧飢饉等々。これまでにはない諸問題に直面している。

こうした中で本当に必要なのは、視野の広い、奥深い知識に基づいた心情豊かな実践力や行動力が備わった人間であろう。

公教育に携わる者としては環境問題を含め新しい課題に対応できる人間の育成が急務であると考えている。

親も教師も時代の先見性に目を向け、今何をすべきか本気で語り合う時期にきている。

そして、おもに家庭ですべきこと、学校ですべきことの共通理解を持って、互いに相手を信頼して任せることが大切である。

家庭教育と公教育の相互乗り入れが今まで以上に必要

になってくる。

## (2)開かれた学校へ

日本の学校はコミュニティの性格を持ちつつ、外部と





は遮断され、独自の特殊な社会をつくってきた。それによつて子どもが守られ平等に学ぶ機会が得られた功績は大きい。

しかし、親も自由に出入りできず閉鎖的であつたことは確かである。しかも、あらゆる機能を取り込み、単に知的側面の成長のみならず、子どもにとつてより望ましいと思われるものはすべて受け入れてきた。そして教育的価値や精神主義的な理由で現代社会においてもほとんど姿を変へることなく存在している。親もそうした全人格的成長の場としての学校の役割に期待している。

これからの時代もこの役割は消滅しないで続くであらう。今後は学習内容の立て直しが求められる。個性重視、こだわりを持つ学習等、個性化教育の方向が強まってくる。

場合によっては、教師だけでは対応がむずかしい。門戸を開いて、専門家や親のボランティアの形等も導入し、協力を呼びかけたらいと思ふ。

教科構成、学習内容の見直しと精選といった教育課程

の検討の際にも親のアイデアや子どもの要望も参考にしてみたらいと思ふ。

プロとしての教師の沽券にかかわるなどと言うのではなく、教師自身も社会に目を向け、研鑽を積みオープンマインドの精神で公教育に携わっていくことが大切であらう。

教育が人間と直接かかわる以上、親も教師も子どもと共に学び続けていく姿勢を忘れてはならないし、その努力を続けていくことをこれからも心がけていきたい。

(お茶の水女子大学附属小学校)